

令和5年度 第1回 大和郡山市総合教育会議

①開催日時 令和5年12月21日（木） 午後3時～午後4時

②開催場所 大和郡山市役所 大会議室

③出席者 上田清 市長、谷垣康 教育長、菊岡洋之 教育長職務代理者、
牧浦温代 教育委員、岩田淳尚 教育委員、大原末子 教育委員、
以上6名

事務11名

④傍聴人数 0名

⑤次第

1. 開 会
2. 市長挨拶
3. 出席者紹介
4. 大和郡山市立学校における働き方改革について
5. その他
6. 閉 会

⑥議事

○事務局

委員の皆様、こんにちは。本日は大変お忙しい中、ご出席の方を賜りまして誠にありがとうございます。ただいまから令和5年度第1回大和郡山市総合教育会議を開催させていただきます。それでは、まず最初に上田市長からご挨拶の方を賜ります。よろしく申し上げます。

○上田市長

こんにちは。よろしく申し上げます。今日は働き方改革がテーマということなんですけど、常々一つだけ気になることがあって、働き方改革が時間の規制のみに偏った、そういう方向で進められているような気がしています。本当の声とか目的とかモチベーションとか人生の中で位置付けとか、そんなことも議論しながら進めなければならないはずなんですけど、どうも時間だけの問題になっている気がしています。前に聞いた話で忘れられないのが、東大寺のお水取りについても、「働き方、間違っていない」という話があったということです。冗談じゃないという話で、休憩を入れて、時間を空けてしまったらお水取りが成り立たないんですよ。そんな半分冗談みたいな話を聞きましたけれども。

いじめや虐待の話もそうだと思うんです。あんまり何でも報告しろ、あってはいかんということに力を入れている。例えば子どもが泣いたら、あれは虐待だとなるので、もう泣かしたらまずい。このあいだ電車乗っていたら、向かいに母親がいて隣に幼稚園ぐらいの女の子がいたんです。何々の駅やとか何とか言うと、慌てて口を塞いで、「黙ってて」と言う。こういうことがもう世間一般になっているみたいです。ちょっと本当にこのままでいいのかなということを考えます。

そういう中で今話題になってるらしいですが、山梨県教育委員会の話題についてですが、文書半減プロジェクトというのを立ち上げています。いろんな団体や自治体から、県内の小中高校に送ってほしいという文書が、大体、月間 300 件ぐらいあるらしいです。その中で送ってもいいものか、或いは、不要か、それともネットにおさめといたらいいかっていう仕分けをですね、文科省出身の教育長が今やってて、その結果、もう文書が半分になったということです。これ、学校の教頭先生が処理していたら大変なことになるんですね、手間とかが。それを送付するもの、しないもの、それからネット上だけへ保管をして必要に応じて出すもの、と三つに分けて、それをこの教育長が毎日一分で判断するそうです。他県からも、視察に来られるそうです。ちょっと学ぶべきところがあるのかなというふうに思います。

もう一つ、働き方と直接関係はありませんが、最近ちょっと気になっているのが、学校の中で悩みがあったときの相談相手について、このあいだテレビでやっていました。友達がずーっとこの何十年間、友達にまず相談して、2 番目が母親だったのが友達の割合がどんどん減ってきて、母親ほぼ横ばいが続いていて、ついに逆転したそう

です。友達を信用しない。これも何かこういういじめとか何か影響しているのかなと思ったりするんですけど、正解はわかりません。でもちょっとグラフを見て衝撃を受けました。これはどういうふうに考えたらいいか、何を意味してるのかなと感じています。また皆さんそれぞれまた考えていただければありがたいと思います。今日はどうぞよろしく願いいたします。

○事務局

市長ありがとうございました。

○委員紹介ー略ー

本日は、今年度の第1回目の総合教育会議でございますので、本日出席いただいている方をご紹介させていただきます。

委員紹介 ー略ー

本日の配付資料の確認をさせていただきます。

配付資料確認 ー略ー

それでは早速ですが、会議の方に入らせていただきたいと存じます。次第4の大和郡山市立学校における働き方改革についてでございます。学校教育課の福西課長の方からご説明をいただきます。よろしくお願ひします。

○福西学校教育課長

国による働き方改革の関連法の制定によって、長時間労働者等に対する健康管理体制の整備等が求められております。本市におきましても、一人一人の教職員の働き方改革に向けて、成果と課題というところを書いてますように、教育委員会の取り組みとして、平成30年度より、様々な取り組みを行って参りました。

令和2年の3月には、大和郡山市立学校における働き方改革のための業務改善方針を作成し、令和2年4月より、資料1にあります、大和郡山市立学校の管理運営に関する規則の一部を改正する規則を施行しております。教職員の長時間勤務を改善し、1、教職員が心身ともに健康で生き生きと働ける環境、2、子どもたちにとって、より質の高い授業、3、若い世代が教員を目指す魅力ある職場の実現を目的にし、1ヶ

月の超過勤務時間が 45 時間以内、1 年間の超過勤務時間が 360 時間以内を目標として設定いたしました。教育委員会、各学校におきまして、様々な取り組みを行って参りました。

資料 2 をご覧ください。上の表 1 につきましては、令和 2 年から平均超過勤務時間の経年データとなっております。過去のデータと比較しますと、小中学校ともに、すべての教職員の超過勤務時間が削減されています。特に大和郡山市立学校の管理運営に関する規則で規定した令和 4 年度までに目標時間であり、国の上限の時間である原則月 45 時間以内につきましては、一般の教職員では、小中学校ともに達成しております。

次に、資料 3 をご覧ください。この資料につきましては、こちらは一人一人の働き方に焦点を当てて、それぞれの目標の達成率をまとめたものでございます。一つ目としまして、表の 3、グラフの 3 をご覧ください。1 ヶ月の超過勤務時間が 45 時間以内を目標に対し、小学校ではグラフの 3 の通り、令和 3 年度は 80%、令和 4 年度につきましては 87%の職員が達成され、働き方改革は推進されております。

一方、表の 4、グラフの 4 をご覧ください。グラフの 4 の通り、中学校におきましては、45 時間以内での達成率は、令和 3 年は 53%、令和 4 年度につきましては 51%と下がっております。また、その下の②ですけれども、1 年間の超過勤務時間が 360 時間以内という目標に対しては、小学校では、令和 3 年度は 50%、令和 4 年度は 60%の達成、中学校では令和 3 年度は 31%、令和 4 年度は 28%の達成となっており、令和 2 年度の業務改善方針で出た 3 年間の目標には達成いたしておりません。

本市の課題としましては、過労死ラインである 80 時間の超過勤務時間を超える中学校の教員が多いことが挙げられます。また小学校では特に管理職の働き方改革の改善が必要となっております。令和 3 年度より超過勤務時間が平均 80 時間、月 100 時間を超える教職員の管理職の面接及び医師の面談を実施いたしております。

資料の 2 に戻ってください。一番下の表の 2 ですけれども、精神疾患を理由とした病休の教職員数の推移を載せさせていただいております。この改革については急務となっております。超過勤務時間の要因としましては、当該教員の面談により、小学校では事務処理、中学校では部活動が上がっております。それらを解消するために、令和 4 年 6 月より学校業務支援員を配置し、各学校の教員の事務作業の軽減を図っております。

また、令和5年度には、連絡システムすぐーの導入と、休日の部活動の地域移行として地域クラブ活動を開始いたしました。連絡網システムすぐーにつきましては今年度2学期より導入いたしました。連絡は、学校ごと、クラスごと、部活動ごとなど、連絡対象を分けて送信することができます。またファイルを添付することができるため、朝の欠席連絡等の時間短縮や連絡の取りにくい家庭とのやりとり、また学校からのお便りなど配布物の印刷や、配布時間などの短縮など、様々な利点を通して、各学校の働き方改革の改善に期待されます。

この8月からは、休日の部活動の地域移行を開始いたしました。生徒数の減少に伴う活動のあり方の見直しと、生徒に専門的指導を提供できる場の設定、教員の働き方改革や競技経験の少ない顧問への対応、地域でスポーツに継続的に楽しむことができる新たな環境づくりを目的として、本年度につきましてはラグビー、ソフトテニス、卓球の3種目を地域クラブの活動としております。

3種目の地域クラブの生徒へのアンケートの結果につきましては、地域クラブを楽しんでいる様子が伺えます。また、今年度から休日地域クラブがスタートした顧問からのアンケートにつきましても、土日に出勤する回数が減り、家族で楽しく過ごす時間が増えた、ありがとうございましたという声を聞いております。今後も生徒教員両者にとってよりよい形となりえますよう、休日部活動を地域移行に進めていきたいと考えております。

最後に、学校の抱える課題の複雑化、困難化が進んでいる中、業務負担を軽減し、教育の質の向上を図るためには、教師を取り巻く環境を見直し、時代の変化に合わせて、学校現場における業務のあり方をリニューアルしていく必要があると考えております。今後も各学校や地域の実情を踏まえながら、様々な取り組みを取り入れていきたいと考えておりますが、働き方改革を推進させるためには、マンパワーも必要であると考えておりますので、引き続き、部活動指導員、特別支援教育指導員等の人的な配置の支援もお願いいたします。以上でございます。

○事務局

はい。ありがとうございました。

それではただいまの説明について、委員の皆様、何かご質問なりご意見等がございましたらよろしく願いいたします。

○岩田委員

資料の 2 ページの特別休暇の教員数の推移で、休暇取得した内で精神疾患の人数がデータとして出てるんですけど、この人たちの超過勤務実態っていうのはわかるのでしょうか。

○福西学校教育課長

必ずしもその超過勤務が原因とは限らないです。例えばいろんな家庭での事情であったりとか、あと学校の自分の仕事についてのことであるとか、様々な内容で休んでいるのが現状です。

○岩田委員

超過勤務イコール特別休暇取得っていうことではない。

○福西学校教育課長

そうですね。はい。その辺りはそうであります。

○岩田委員

よく新聞紙上では超過勤務の異常な実態が精神的ストレスで自死になるとか、いろいろとそういうものもあるけれども、このデータの中ではそういう傾向ではないと。

○福西学校教育課長

はい。

○谷垣教育長

ここには載せてないんだけど、調べてくれたのかな。今年の若年退職が 9 名だったかな。そのうち、30 代までが何人でしたか。

○福西学校教育課長

20 代 30 代がほぼもう 8 割占めてます。

○谷垣教育長

若い教員の退職の、ここ最近の推移は。

○福西学校教育課長

若い数まではちょっと調べてないですが、去年は全体で 10 名、今年度については 9 名です。

○谷垣教育長

今年も 9 名のうちの 1 人だけ 50 代、あとはもう 20 代、30 代です。去年はちょっとわからないですが、全体の数ということで。よく他の業界でも言われることだとは思いますが、最近ちょっと、若い人がやめていく。うちの市でもちょっと精神的な

ことで何人かがやめています。

○福西学校教育課長

そうですね、はい。

○谷垣教育長

ストレスとかで続けられなかったということで。あとは、もう昔からあった、結婚とか、何か違う仕事するとか言う人もいます。ちょっとその辺りの、若い人たちの考え方が変わって来ているのかなと思います。

教員不足ってことはもうマスコミや新聞でご承知のことだと思います。講師の補充が見つからない。教員採用試験を受けて、昔は、不合格であったら講師登録をして講師をしていましたが、もう今は不合格になったら、違う仕事、もう教育とは違う仕事に行ってしまいます。今の時代、結構いろんな仕事がありますので。だから講師ができる人が減っている。講師をお願いしてるのは、もう退職した教員に無理をしてお願いしてということになってきていて、若い講師はなかなか見つからない。そんな状況もあります。今回の働き方改革とは少し違うかもしれないけど、若い教員が、やめる数が増えてきているという報告を聞いて心配をしています。

○上田市長

講師の最高が 85 歳とかで、若い人より元気だと聞く。情熱があるって。

○谷垣教育長

今は仕事を変えることあんまり若い人は抵抗ないんですね。

○上田市長

市の職員の採用試験でも一緒ですね。辞退の、辞退の、辞退の、辞退。次から次に繰り上げるんだけど、それがまた辞退、また辞退。年がら年中採用試験しています。会社はどうかわかりませんが。

○谷垣教育長

働き方改革というのとはちょっと違うんだけど、どうしても何か、ブラックだとかね、そういう、定額働かせ放題とかね。ああいう言葉が流行ってしまって、イメージがもう定着してしまっている。

○上田市長

その背景となっているものの一つに、基準が時間しかないという部分がある気がします。

○谷垣教育長

はい。今、言っているのはやっぱり魅力です。時間はかかるけど、やっぱり教員の仕事のいいところをもっと発信をしてほしい。

このあいだ新採の教員が集まった研修があったんですけど、そこでも聞いたらやっぱりしんどいとは言います。その一方で教師になってよかったという感想もあります。卒業式まで行ったら、もっとよかったって思うって私は言ってたんですけど。そっちの側があんまり言われずに、もうブラックな部分ばかりが取り上げられてしまっている。超過勤務時間の数字もそうで、だんだん良くなってますよって言えたら、また違ってくると思うんです。

あと、長時間勤務して残っているのはやっぱり年を取っている人が多い。昔からそれでやってきているから。若い人たちは比較的さっと帰っているそうです。

○上田市長

そうですね。僕らは楽しいんだから別に何も思わなかったから。

○谷垣教育長

そういう人に「もう早く終わって帰りなさい」と言うたら、いろいろ抵抗受けて、校長や管理職で困っている人もいます。

○上田市長

土日の出勤がなくなって、家族と楽しく過ごしたとか、そういう人もいるでしょうけど、それが苦痛の人もいる。いろんなパターンがあるから。

○谷垣教育長

そういう感じがします。若い方たちは大事にしていますよね、関係性を。

○事務局

はい。時代が移った感じしますね。

○谷垣教育長

昭和の世代の場合と、令和の世代で、もうちょっと違うと思いますね。

○上田市長

教えて欲しいんだけど、過労死ラインって言っているけど、それはどういう基準で決まったのか。そこら辺りもよくわからない。そんな仕事の中身によっても違うし。例えば、単純肉体労働を何時間も続けていたら、それはちょっとあかんやろうと思います。でも例えば本人は楽しいと思ってやっている場合もある。

○福西学校教育課長

やりがいを持ってね。

○上田市長

これ、職種ごとで違うのかな、時間は。

○谷垣教育長

全職種一緒です。

○福西学校教育課長

労働基準です。

○谷垣教育長

宝塚なんかで、ああいうことがあったら、そこを言われるんです。やっぱり労働基準法とかそういうことになっちゃうわけです。

音楽の世界も大変なんじゃないですか。

○大原委員

私たちはやっぱり、根底に好きっていうのがあるので、だから、どうしたらお客さんに喜んでいただけるか、がある。

私は今いろいろ聞いてみて、それこそ市長が時間だけに集中してるっていうのは、本当にちょっとこれは、そういう改革ではなくて、授業をどのように面白く、子どもたちに自分に意識を持って見てもらうかっていうふうなことを楽しく考えて教育するというのが大事だと思います。教育も音楽もそうなんですけども、すぐには目には見えないんですけど、それをずっときちっとしていくとだんだんその子どもたちが大きくなっていくとそれがちゃんと身についてくるってことなので、何か今の世の中っていうのは目に見えることだけにしか重点を置かないというのがちょっとかなしい話かなと思います。これからの社会どうなっていくのかなと思いますね。

だから、若い先生のやりがいがやっぱりないっていうので、早くやめてしまうということにはやっぱりこれだけしか働いたらだめだとか、それも少し関係してくるのではないかなと思いますね。

クラブが好きな先生もあるじゃないですか、苦手な先生もありますけど。中学校でしたら、クラブに命を燃やすという先生でしたらそれでいいんじゃないかなと思うんですけども、何から何までラインを引いてしまうと。それこそ運動会で走るのが得意な子、不得意な子っていうのが全部一律のラインになって、みんな1人ずつリレーで

走るということに一時なりました、私の子どもの運動会の時に。見てても面白くないし、走ったらだめって言われた時の子どものショックも大きかったので、そういう教育の仕方ではなくて先生にとっても、どうしたら自分が楽しく、子どもたちに教えられるかっていう方をもっと話し合えばいいんじゃないかなと思いますね。

もちろん時間がなくなると、大変なことは大変なので、ある程度はそれも考えていけないところなんですけど、なんか今見てても本当にそればかりにもう重点を置かれて、もうちょっと大事なことが抜けてるんじゃないかなというのは感じました。

もちろん時間に関しても大事なことなんですけどね。それとやっぱり並行して大事なこともあるだろうなと。なので、市長とかね、教育長さんの若いときは、時間に関係なくやったというのは、やっぱり情熱だと思うんですね。

今の若い子がどれだけ情熱を持って先生になっているのか分からないですし、とりあえず職に就きたいと思ってなってるのかもしれませんが、それでもいざ子どもたちを教える時にやっぱりこういうふうにしたいなっていうようなことが出てくるような、そんな希望が持てるような職場になったらいいなと思います。

○谷垣教育長

だから、我々が言っている働き方改革も、もちろん、職員の生活、健康についてのことがあります。そして、もう一つは、子どもに対しての時間を増やすこと、それは今、大原委員のおっしゃった授業というのが一番基本だと思います。だから、その時間数を減らす、単純に、退勤時間が遅くならないってことだけじゃなくて、授業などの子どもに対しての時間以外の仕事をできるだけ減らしていこうと言っている。

事務的な仕事が、先ほど市長から話あった文書を減らすとか調査を減らすとかっていう部分で、そういうことをできるだけ、他の人にやってもらう。教員はもう授業に力を入れられるような環境を作っていきたいというのが、一番の改革です。

だから、部活動については、これも本当に長いこと日本の学校文化とかスポーツ文化が学校体育に依存してきた、文化部もそうでしょうけど。それを変えていくというのはかなり大きな作業だと私は思います。ヨーロッパだったら、そういう学校のスポーツではなくて、基本的にはクラブチームでスポーツをやっている。そこからいい選手が出てきている。津田淳哉君っていう郡山出身の六位でドラフトがかかった彼はもう学校でやってないですよ。小泉ファイターズというところでやって、そして大学で野球を続けて花開いたということです。

それでいいだろうということですね。サッカーはサッカーで、いわゆる日本代表などのトップで活躍しているのは、今クラブチーム出身です。そういうふうにはスポーツの方も変えていく。ただ、日本はずっと学校と、あとは企業スポーツに頼ってきているから、だからそれを変えていきたい。それが今始まったんだろうと思います。

○大原委員

それはすごくいいことだと思います。やっぱり専門家に教えてもらうということは早道って言いますか、やっぱりしたいことをきちっとできるということ。

○谷垣教育長

専門家は学校にもいるんですよ。そういう人らはもうそっちでやってもらう。学校の先生は先生で、そして土日はそういうクラブチームで教えられる環境を作っていくのが今の地域スポーツの移行なんです。我々周りも意識を変えてやっていかないといけない、クラブについて。

○岩田委員

すいません。いいですか。

このアンケートを見ると、いわゆる、超過勤務時間っていうのは、年々特に小学校なんかは顕著に下がって行って、45時間以内はもうほぼ9割近い。中学校ではなかなかそうはいかないようですけども。例えば勤務時間が削減された先生方の声で、その取り組みの中で子どもと向き合う時間が増えた、とか、或いは、やりがい、充実感が増えたとか、そういう仕事の内容との相関関係のようなアンケートはないんですか。

○福西学校教育課長

そうですね。今後やっぱりそういう必要があるかなと思うんですけど、今のところそれはとってはいいです。

今の取り組みとしては、学校の中で、定時退校日を設けるとか、そういうことをしながら、最終的にはもうゴールはもう子どもたちとの向かう時間を増やすっていうところが一つだと思っています。

○岩田委員

ちょっとそういう業務の改善で、学校行ってる時間が短くなって、短くなった分の先生方のモチベーションとかやる気とか、或いは、教育に対する充実感とか、そういうのが分かると、業務削減がプラスに働いてるっていうような、そういうのがわかるといいかなと思うんですけどね。

○福西学校教育課長

またちょっとそういうのも、アンケートなどで聞けるかも、ちょっと考えていきたいと思います。

○岩田委員

ただ時間が減って楽になったというだけでは、教育の質としてはどうなのかなっていう感じもしますよね。

○谷垣教育長

現場では、早く帰れ、早く帰れと言われ、仕事も家に持ち帰らないといけない。そういう効果についてのアンケートも取ったらいいと思うけど、おそらくそういう不満の方が多いかもわからない、教員からしたら。そうすると本当の意味での改革になっていないわけで、だからもう中身を変えて、減らさないといけない。時間だけ減らしても仕方ないってことです。

○福西学校教育課長

はい。

○谷垣教育長

管理職とか、20年前からの教員、我々もそうですけど、確かに教員は時間をあんまり考えないで仕事をしてきた。例えば今日も6時に終わろうとか、それじゃどんな段取りで仕事をするんだとか、そういう感覚はやっぱりなかった。

公務員もそうかもしれない、ちょっとわからないんだけど。何時まででも居てもいいみたいな。そういうところを変えていきたいと思いますということも必要と思う。

教頭なんかですと、最後の人が帰るまで鍵を閉められない。教頭とか管理職がもうこれだけ超過勤務が多いのは、最後まで残らないといけないから。たとえ1人でも遅くまで残っていたら一緒に残らないといけない。そのシステムがちょっと。だからもう早く帰りましょう、と。管理職は気の毒。特に教頭。

○上田市長

だから、何て言うのかな、やりたくて、いやこれはもう、やりがいを感じてやっている時間と、無駄だと思いながらやらざるをえなくてやっている時間と、時間の質が違うと思うのよね。そこらを分けられるような調査の仕方とか、或いは呼びかけとかね。機械的に5時何分になったら、ここから超過だから帰れと。そういうんじゃない、何かちょっともう少しマイルドな呼びかけを各学校でできたらいいんだけど。どうで

しょう。

○谷垣教育長

その通りなんだけど、前のおりしてたら、いつまでも残っているしね。若い人は割とわかっている人が多いんですが。最近よくワークライフバランスっていう言葉で言いますが、プライベートを大事にしているという人は、若い層の方が多い。我々も含めて、60歳に近いようなのは、もう仕事が趣味みたいな人間が、たくさんいたのは事実ですが、そこに対してどう変えていくか、ですかね。これは年代別で取ってないのでわからないでしょうが、若い人の方が少ないのではないかな、超過勤務というのは。

○福西学校教育課長

そのように学校の現場からは聞いています。

○谷垣教育長

それを上の人が見て「最近の若いもんが」って、またそういう人がいるわけです。

○上田市長

お医者さんの世界でも難しいんじゃないですか。

○牧浦委員

自分のことですからね、結局は。ただ1人でいつまで残っても、その勤務時間がどうのこうのと考えたこともなかったし。

○谷垣教育長

自殺するまで時間的に追い詰められていても、研修だということもあるわけでしょう、自己研修の時間だと。自己研修と勤務とを、どこで区切るかというのも難しい。

○牧浦委員

病院は自己研鑽だからもう、勤務時間じゃないっていう、ちょっとそういう感覚は、とにかくそれでずっと来ましたね、昔は。何時間居ようが気にしてませんでしたし。個々のことですからね。全体のことなんて見てない、他の先生がどうだとかは。

○谷垣教育長

何か宝塚のニュースとかが出てくると、そっちいってしまう。その勤務のさせ方とか、労働状況みたいなものが、あれはひどいじゃないかっていう話だけになってしまう。

○上田市長

菊岡委員のところはどうですか、勤務時間は。

○菊岡委員

ちょっと、そうはいかないですね。はい。

○上田市長

機械的にここで作業は止めてというわけにはいかないですもんね。

○大原委員

先生が授業をする、それ以外の事務的なことっていうか、また別の人がしたらいいなっていう案がありましたけど、その場合って、やっぱりその事務的な仕事する先生もやっぱり先生の試験を受けないといけないんですか。

○谷垣教育長

学校業務支援員っていうのは、今、各学校に一人いるんですけども、それはもともと事務室の仕事だけだったんですけども、事務だけじゃなくて教員の仕事も、手伝ってくださいねと、具体的に印刷をするとか、何かプリントの配布物をするとか、事務的な統計をとるとか、そういう仕事をやってもらっています。

○大原委員

割合的にはどうですか、学年に2クラスある場合には、2クラスで1人いるのか、それとも全体で1人なのか。

○谷垣教育長

全体で1人です。

○大原委員

じゃあ、少ないですね。

○谷垣教育長

うん。ただ、いわゆる事務的な仕事なんで、印刷するとかなので、子どもの指導に当たるわけじゃないので。

子どもの指導に当たる、例えば、特に最近増えてる特別支援が必要な子どものための支援員というのがいる。それは61人いる。全校で61名ですけど。

○大原委員

すいません。私は先生になったことがないので、その先生のお仕事っていう本当に忙しいっていう仕事の内容がちょっとわからないんですけど、その授業を教える以外

に、もちろん、年間のカリキュラム作るっていうのはあるんでしょうけど。

そのあたり、どういった忙しいと言われる仕事があるんですかね。教えていただければ有り難いです。

○福西学校教育課長

例えば授業を教えるのは当然ですけども、そのための準備、それからあと、保護者との連絡取ったりとか、それから不登校のお子さんもおられたりとか、いわゆるいじめの問題だったりとか、そういう突発的なものの対応であったりとか、そんなこともやっぱり日常の中では起きてくるので。

○大原委員

それはやっぱりその先生でないと解決できないですよ。本当にそういう支援員というのはもう本当に事務的なことしかできない。

○谷垣教育長

その学校業務支援員というのはそうですね。だから、課長が言った、保護者対応などはおそらく以前から較べると、ずっと時間が増えてます、その家に行って説明したり。それを誰か他の先生でできるか言ったらできないですよ。これは担任しかできない。その時間が必要になってくる。さっきも言ったように、授業準備とかそういう対応っていうのは先生の仕事なんで先生しかできない。だから、それ以外の仕事とにかく、違う人にやってもらえる体制を作ろうとすれば、学校業務支援員とか学校用務員とかそういう人を増やしてくださいってことになる。

管理職なんかでも、さっき教頭先生が大変だって話してましたけど、営繕の仕事が多いんですよ。営繕というのは、グラウンドの芝を刈ったり、草や植木を切ったり、何か壊れたら直したりとか。それは教頭の仕事と違うでしょう。だけど、校務員さんも減っている。

○小鯛教育総務課長

技能員さんですね。年々勤務時間が減っています。来年はちょっと少し増えるかもしれませんが、現在、4時間15分という時間の勤務です。

○牧浦委員

教頭先生が最後に鍵を閉めるというのは時々お聞きするんですけども、それは教頭先生が閉めなきゃいけないんですか、最後は。決まりなんですか。

○谷垣教育長

いや、要するにセコムですからね。セコムで最終セットするには、カードを渡すことになる。最近はある教頭だけでは大変だということで、校長が「自分が残るわ」と言っていて残っているケースもあります。

○牧浦委員

昔は用務員さんとかがちゃんとやってくれていましたね。

○福西学校教育課長

泊まりでね、今はなくなって、セコムに変わった。

○谷垣教育長

また、子どもの中に、親の都合もあって、7時ぐらいに登校してくる子もいるわけです。その時間に誰か行って開けてあげないといけないという。もうそれはやめときましようって言って、今7時半以降ですね、もうそれまでは開きません。門が開きませんということを周知して、それも今度保護者から言えば、例えば早く仕事に行かないといけないとか、自分がね。そしたら子どもを1人置いておけないから、開けてほしいという。それは願いとしては分かりますよね。でもそれに応えてたら誰かが7時半に行って開けないといけないということになる。

○大原委員

そうすると学校24時間になりますよね。24時間までいかないけど、そうなりますよね。

○谷垣教育長

朝7時から夜9時ぐらいまでずっと開けてないといけない。そういうわけで、そういうところでも苦労しています。様々な子どものニーズに応じていくとね。

公助共助自助というような、災害で使われる言葉を聞いたんですけど、我々としては公助の部分でいろいろすぐーなどのシステムを入れたりしています。共助は各学校の中で、みんなで助け合って勤務時間を減らす、どうやったら減らすことができるかを考える。最後は自分がどう時間をうまく使うのかっていう、それをトータルしないとなかなかうまくいきませんっていうことですね。教育ってある種真面目でもあるから、これででき上がったとか、完璧とか、無いじゃないですか。でもそれを目指すから、何時間、何時まででもやっちゃう。勤務時間が5時までなんだから5時までにはできることだけしようと割り切ればできるんだろうけど。そんな先生はそもそも情熱がないとかって言われて。本当はそれだけ業務を減らすのがなかなか難しいという

ところがある。

○上田市長

そうなると行き着くところは人手不足っていう話になる。

○谷垣教育長

そう。でも教員になってくれる人がいるのかって言ったら、それもいない。

○上田市長

市役所でも技術職員の人手不足は深刻です。技術職員とか保健師とか。県とか大阪とかに通ったらもうそっち行ってしまうというのが一つの傾向です。大きなところへ行けば給料がいい。いろんなことが繋がってると思う。本当は、そう単純な、お金や時間だけの問題ではないと思う。

○谷垣教育長

楽しかったら本当に何時間しても、やり甲斐感じてできる。努力したことが報われたら、全然しんどくない。なんぼ努力しても報われない努力が一番しんどい。これだけ一生懸命やっても保護者が理解してくれなかったりすると、その溜まったストレスに、昔やったらやめるというのはあまり考えなかったけれども、最近はもう意識が変わって来て、やめる人が増えて来ている。ちょっとそういう悪循環になりかけているところがあります。教育というのは、やっぱりいい先生。子どものためにいい先生。それが一番大切な環境じゃないですか。

○上田市長

単純に時間だけじゃないってことは伝えて欲しい、というか、そういうことを感じて欲しいな。何かいい方法で。

○事務局

それではいろいろ委員の皆様、貴重なご意見、お話ありがとうございました。それでは次第4の方はこちらで終わらせていただきまして、その他でございます。事務局の方からは特にありませんが、委員の皆様、何かございませんか。

(特に発言なし)

特に無いようですので、それでは以上をもちまして本日の会議は終了させていただきます。どうもありがとうございました。

以上